

こちら宇宙人特別居住区

2



チャイムとほぼ同時に教室に駆け込むと、クラスメイトのユウスケが話しかけてきた。

「オーッス、今日は腹違いのお姉様と一緒にじゃなかったのか？」

「腹違いじゃねーって。」

俺はユウスケの頭をはたきながらそう言った。

便宜上、俺とリナは、姉弟ということになっている。

しかも、同じ学年なので双子の姉弟で通しているのだ。

本当は、腹違いどころか、種も違うのである。

ちなみになぜリナが姉なのかというと、リナの誕生日が7月、俺は10月だからという妥当な理由だ。

世界で最も似ていない双子として、この学校ではなにげに有名であったりする。

「しかし、ユウスケ、俺がなんでリナと一緒に来てないってわかったんだよ？リナとはクラスが違うだろ？」

「ちっち、ライ君、俺を甘く見てもらっては困るなあ。俺を誰だと思ってるんだ！？リナさんファンクラブ会員ナンバー3の松葉ユウスケだぞ！？教室の窓から校門あたりを30分くらい日課としてずっと観察していたに決まっているじゃないかああああああああ！！」

そんなストーカーまがいの行為を誇らしげに言われても……。

ユウスケは背がスラリと高く、さらさらの長い髪に甘いマスクとパッと見男前なのだが、口を開けばがっかり王子というべき人材であった。中身はかる〜く、若干キモく、そしてリナの追っかけなどをしているので、容姿のわりに女子からは全くモテない残念なやつなのだ。

1年から同じクラスで、その時からなぜか俺とウマが合い、ずっとツルんでいる。

背が平均よりちょっとだけ低い俺とユウスケは、クラスでは凸凹コンビと呼ばれている。

「よっ凸凹コンビ、今日もしょうもない会話してんなあ。」

そう声を掛けてきたのは、周防サクラだった。

サクラという名前の通り、はかなく散りゆく可憐な少女だと思いきや、全くそんなことはなかった。

デビュー当時の内田有紀を彷彿とさせるような、かなり短いショートカットに切れ長の目、太い眉、そして名前に失礼なくらいの褐色の肌。

スカートを履いていなければ男と間違えてしまうほど精悍なビジュアルなのだ。

実際、彼女の下駄箱には同性からのラブレターが入っていない日はないという噂だ。

「よおライ。リナにあの件頼んどいてくれたのかよ？」

サクラはチンピラのようなしゃべり口調で俺に聞いてきた。

「知らねえよ。自分で頼めよ！」

「け、使えねえ奴。せっかく運命の再開を果たしたってえのによ！あたしのリベンジはいつ果たされるんだあああああああああ！」

リナが小学生の時、空手の全国大会で優勝したことはさきほど述べたが、決勝戦の相手がサク

ラであったらしい。

サクラはリナに敗れ、リナを生涯のライバルとして勝手に認定してしまったのだ。

そこへリナが同じ学校に入学してきたため、これは運命とばかりにサクラはリナに果たし状を何度も送っているのだが、空手は訓練だけで試合は一切しないことにしたから、とりなに断られてしまっているのだ。

こうやってサクラから、一応弟の俺に何とか仲介してくれるよう頼まれ（脅され？）ているのだが、試合でけがをしたら仕事に差し支えるという理由であるため、俺から頼むこともできず、サクラの依頼を適当にかわし続けているのだった。

「リナさんを傷つけることは俺がゆるさないぞおおおおおおお！・・・ぐふ」

サクラの膝蹴りがユウスケのミゾオチ深くに突き刺さった。

「うるせえんだよ、このオタク野郎！」

「サクラちゃん、もう少し手加減して・・・。朝食ったものが出てきそうだよ・・・。」

ユウスケは変な汗をだらだらと流しながら、その場にうずくまっている。

しかし、俺の周りにはなぜこう凶暴な女ばかりなんだろう。

俺はうずくまっているユウスケの背中をさすりながら、ため息をついたのだった。

「ユウスケ君、大丈夫？」

そう言ってユウスケの額の汗を拭いてあげているのは、綾坂コトミであった。

サクラとは対照的に、肌は雪のように白く、背中まで届くふわふわした髪は、彼女の優しい性格を表しているようだった。

サクラとは幼なじみであるらしく、いつも二人で一緒にいる仲良し同士だ。

性格はひかえめで、良く気が付く、素晴らしい女の子である。

「コトミちゃん、いつもやさしいね・・・。」

ユウスケがコトミに微笑みなかける。

「そんなことないわよ・・・。」

コトミがはにかむような笑顔で応じる。

「でも、俺の顔を拭いてるそれ・・・紙ヤスリだよね・・・。」

よく見ると、ユウスケの顔にはうっすらと擦り傷が出来ており、赤い血が転々と出現していた

。

「きゃああ！ハンカチを間違えて、紙ヤスリを持って来ちゃった！」

「ギャハハハハ！コトミ、ナイス追い打ち！さすが私の幼なじみ。」

「違うったらサクラ！ほんとにゴメンね・・・ユウスケくん。」

「いや、いいんだよ・・・。慣れてるから・・・。」

ユウスケはあきらめに似た表情で笑顔を作り、そう言ったのだった。

コトミは本当に良い子なのだが、天然ぶりが正に宇宙レベルであった。

どこをどうやったらハンカチと紙ヤスリを間違えるのだろう・・・。

コトミの家に監視カメラを置いてとくと観察してみたい。

俺はあわてふためくコトミを眺めながらそう思った。

退屈な授業が終わり、下校の時間となった。

サクラは空手の稽古、コトミは吹奏楽部、ユウスケはリナファンクラブのミーティングへとそれぞれ向かっていった。

みんな熱中するモノを持ち、それに向けて今日も努力を重ねるのだろう。・・・ユウスケは少し違う気がするが・・・。

さて、家に帰ってゲームでもするか。

俺はだらだらと帰りの荷物をまとめると、教室を出ようとした。

その時、制服のボタン裏に付け替えているピアスから、ポロの音が聞こえてきた。

「ユウスケ。今いけるかブー？」

「なんだ？」

まだ教室に残っているクラスメイトに気づかれないように、小声で返事をする。

「居住者からの緊急信号が出ているブー。」

「場所は？」

「それが、学校からなんだブー。」

「なに？ここか？」

「野球部部室の裏あたりに言ってみてくれブー。リナは別の事案で動いてるから、とりあえずライだけで行って見てくれブー。」

「ゲ、俺ひとりかよ・・・。」

俺はそう毒付きながらも、急いで現場に向かったのだった。

「野球部部室ってどの辺だ？」

俺は若干あせりつつ、学校の敷地内を走りながら、それらしき建物を探していた。

この辰巳市立岩魚城高校は、敷地もそう広くなく、複雑な造りでもない。

だが、ここに通り始めて1年半も経つのだが、俺は帰宅部で学校に長居しないので、野球部の部室など全然知らないのであった。

とにかく探せばすぐに見つかるだろうと安易に考えウロウロしているのだが、全くみつからない。

仕方がないので下校している生徒を呼び止めてやっと場所を聞き出すと、急いでそこに向かった。

野球部部室と聞いて、俺は通っていた中学と同じように校舎とは別のプレハブみたいなところだと勝手に思っていたのだが、実は校舎内の一階にあるらしかった。

さっき聞いた情報を頼りに、それらしき場所に到着すると、男子生徒が一人体を震わせながらうずくまっていた。

「こいつに間違いないブー。アンドラ星人だブー。」

俺はゆっくりと、見た目はまるっきり人間のアンドラ星人に近づき、声をかけた。

「大丈夫か？」

「遅えよ……。」

アンドラ星人は恨みがましい目で俺を見上げた。

口の端から血が流れている。

見たことのある顔だった。

クラスは違うが、同じ学年の者だ。

学校のヤンキー達にパシりにされているのを、何度か見たことがある。

こいつ、宇宙人だったんだ……。

俺も人のことを言えないが、背が低い。

そして、地味なパーツが顔に適当についている、といった顔立ちだ。

髪の毛はだらだらと伸び、パサパサとして、全くキューティクルを感じられなかった。

こんなことを言っただけではいけないが、思わずいじめたくなるようなヤツだ。

俺はそんな地味そのものといった容姿のアンドラ星人を眺めながら質問した。

「何があったんだ？」

「見りゃわかるだろ？いつもの奴等にボコられて、金取られたんだよ！」

アンドラ星人はまくし立てるように言った。

「相手は地球人か？」

「……そうだ。」

俺はため息をつきながら言った。

「……。気の毒だとは思いますが、俺等はおまえら宇宙人のボディガードじゃないんだ。この緊急信号は、宇宙人同士のもめ事や、おまえらの正体がバレたときに使ってくれと最初に説明があったはずだが。」

「なんだよ！宇宙人は一切地球人に手が出せないんだぜ！あんな奴等、一瞬でゴミに出来るのに……。やられっぱなしでいろっていうのか！？」

アンドラ星人は口から泡を飛ばしながら反論してきた。

逆ギレかよ……。

「イヤなら帰れよ……。別におまえ等に地球に住んで欲しいなんて頼んでねえんだ。」

俺は凄みをきかせた目でアンドラ星人を睨みながら、低い声でそう言った。

アンドラ星人は不服そうな表情でしばらく俺を睨んでいたが、やがてあきらめたようにフッと笑うと言った。

「おまえ、たしかD組だったよな。D組の綾野っているじゃん？あいつ紹介してくれないかなあ、頼むよ。」

俺はあきれた表情を隠しもせずに、アンドラ星人のにやけた顔を見つめた。

「てめえ、ケンカ売ってんのか？宇宙人は地球人に交際等特別の情を交換してはならない。地

球に来たとき説明受けたらろうが！綾野に近づいてみる。おまえをミカン箱に詰めて宇宙に送り返してやる。」

俺がそう言ったとたん、アンドラ星人からすっと表情がなくなった。

黒目がゆっくりと広がっていき、ついには真っ黒の目だけが俺を正面から見つめていた。

俺は目をそらすこともできずに、ただただその目をずっと見続けていた。

あたりからは一切音がしなくなり、景色も灰色に見える。

呼吸すらできない。

そんな感覚だ。

まるで空気が一瞬で全てなくなってしまったような。

・・・・・・・・・・。

この時間が永遠に続くかと思われたとき、アンドラ星人が不意に目を反らした。

ふいに景色に色が戻ってき、学校内の喧噪が、耳の中にうるさいほど届いてきた。

俺はぜえぜえと荒い呼吸をくり返した。

アンドラ星人はフーっとため息をつきながらボソボソと言った。

「あんまり刺激しないでくれよな。俺は地球人と同じくらいキレやすいんだ。」

目は元に戻っていた。

アンドラ星人は、まだ息の整わない俺を置いて、その場から立ち去っていった。

俺はアンドラ星人の後姿を目で追いながら、もしかしたら、俺は殺されかけたんじゃないだろうか、と思わずにはいられなかった。

「保安2から通信へ。事案は一応解決・・・。」

俺はポロにそう報告して、未だに去らない寒気のようなものを感じながら、帰宅の途についたのだった。

「ただいま〜。」

家に帰ると、リナは先に帰っており、事務所でポロとなにか話し合っているようだ。

リナが対応していたという事案のことだろうか。

「あ おかえり、ライもちょっと。」

リナに呼ばれ、俺は事務所の席に腰を下ろした。

「今日はライもお疲れだったブー。」

「ああ。」

俺は短く返事を返した。

「学校で緊急信号だって？どうだった？」

リナが興味津々といった様子で聞いてくる。

「あいつ、ヤベえ。リナも近寄らない方がいいぞ。」

「アンドラ星人だったっけ？まだ映像見てないんだけど、確かにやばい宇宙人ね。確か生殖活動に特徴があって……。」

「それより、リナの方はどうなった？解決したのか？」

俺はリナの話を遮ると、話題を無理矢理変えた。

あの宇宙人のことを、思い出したくもなかったのだ。

「そうそう。私の方は探し人だったんだけどね。それがちょっと大変そうで……。」

「そうなんだブー。母親から、子供が一人行方不明になったから探して欲しいって依頼があったんだブーが、その探し人が、コモイ星人なんだブー。」

リナとブーは顔を見合わせながら、ため息を付き合った。

「コモイ星人ってどんなだっけ？」

俺はアハハとごまかしながら聞いた。

「ライ……。アンタ……。」

リナのお説教を喰らう前に俺は先手を打った。

「宇宙人の種類が多すぎるんだよ！アルファベット数くらいならなんとかなるのにさ。だいたい名前だって似たような名前ばかりだろ？全部覚えてる奴の方がオカシイんだよ。なあポロ、コモイ星人ってどんな奴？」

あきれりリナを横目で見ながらポロが説明を始めた。

「コモイ星人っていうのは寄生型の宇宙人なんだブー。つまり、宿主に寄生して地球に住んでるんだブー。」

「寄生型の宇宙人なんて、それこそ五万といるじゃねえか。なんでややこしいんだ？」

宇宙人の地球での居住方法は様々である。

地球人と見た目がまるっきりそっくりな宇宙人はまずいないので、色々な方法で地球人にばれないよう生活を送っている。

最も一般的なのは、宇宙の技術で開発されたビジュアライザーだ。

通称ビザと呼ばれるもので、見た目は腕時計だが、屈折率と触覚点を操作して、見る者に別の

姿をみせるというものである。

ある程度の接触も、ごまかすことができる優れものなのである。

人型の宇宙人は、たいがいこれを利用しているのだが、必要のない者もいる。



寄生型は必要のない者にあたるだろう。

色々な形態で宿主に寄生して、地球に住み着いているのだ。

地球人の体内に潜むもの、身体に同化するもの、元々地球人の持つ五感では認識できないものなど色々だが、寄生した地球人に影響を与える宇宙人もいる。

あふれるエネルギーをくれるもの、病気への耐性を高めてくれるものなど、良い影響を及ぼすものもあるが、悪い影響を与えるものももちろん存在する。

これを宇宙局ではギフトと呼んでいる。

良い影響、悪い影響、色々あるが、プラスの意味を持たせて前向きに考えていこうという意味でこう名付けられたらしい。

「もしかして、ギフトがやばいのか？」

「そうなのよ……。」

リナが大きなため息をついた。

「でも、悪いギフトを持つ寄生型は、居住お断りのはずだろ？」

「地球生まれの二世の中に、亜種が出たことよ。」

なるほど。俺はふむふむと納得した。

亜種というのは、突然変異で、その種では普通持たない能力を持って生まれた者をいう。

「ギフトのまじい亜種が出た時点で、家族一緒に地球を去らなくちゃならないんだけど、どうもその子と隠して暮らしてみたいで……。」

「しかも、コモイ星人は地球人の五感では認識できない不認識系なんだブー。」

そう言ってポロは頭を抱えている。

「見つけられないってことかよ……。」

これはかなりやっかいな事案そうだ。

「で、どんなギフトなんだ？」

「それが……。」

ポロが言いかけて口をつぐんだ。

「なんだよ。そんな物騒なもんなのかよ。もしかして、病気か？それか、凶暴化するとか……。前にあったよな……。」

ポロは首を振りながら言った。

「このコモイ星人亜種に寄生された地球人は……。」

「地球人は？」

「バカになるブー。」

「……は？」

バカになる？なにそれ……？それって……

「深刻なのか？別にいいじゃん。困ると言えば困るけど……。」

「何いってんのよ！」

リナが机をドンと叩きながら言った。

「バカになるのよ？恐ろしすぎるじゃない……。もし私が寄生されたら、私この仕事できなくなる……。そんなの……。いやすぎるでしょ！」

「そうか？」

バカになるというのがどの程度なのかよく分からなかったが、そんなに困ることなのか？賢すぎて悩みを抱えるより、バカの方が幸せに暮らせるかもしれないぜ……。

するとリナが俺の考えを読みとったような顔をして言った。

「あんたね……。俺はもともとバカだから関係ないぜ～って顔に書いてあるわよ。」

「そんなこと思ってねえよ！」

「いや、それよりもライはすでに寄生されているのかもしれないブー。」

「それも有りうるわね……。」

二人は真面目な顔で俺の方をまじまじと見ている。

なんて失礼なやつらだ。

おまえ等に比べれば頭は足りないかもしれないが、その辺の奴よりは全然頭はいいんだぞ。

「ライ、念のため、寄生型確認ゲートくぐってみてくれる？」

「な……。」

リナの目は本気だった。

俺は結局、事務所の片隅においてある寄生型確認ゲートを無理矢理くぐらされた。

案の定、俺に宇宙人などももちろん寄生しておらず、ライは元々バカなのだ、ということで二人は納得した。

俺はプライドをずたずたに引き裂かれ、枕を濡らしながら眠りについたのだった。